中村哲さんとの出会い　　薄暗い彼の下宿先で　　三苫英太郎

出会いは、1967 年の頃の寒い時期だったと思う。

高校時代の同級生宮崎信義君（現在　久山町療育園　重症児者医療センター理事長）を訪ねて、京都から私の故郷大分県日田市の田舎に帰省する途中が博多経由だった為である。

ある時、中村哲さんの下宿先に連れて行かれ、彼の薄暗い部屋で、三人で炬燵に入り背を丸めながら酒を酌み交わしながら、ぼそぼそと話しをしたことを昨日のことのように想い出す。だが、そこで、何を語り合ったのかは全く記憶にない。

　然し、彼の本立ての上段に岩波書店発行の内村鑑三全集が整然と並んでいたことだけは、鮮明な記憶で今でも忘れがたい。

アフガンでの活動の中で、医療行為のみならず、人間の基本的生存条件としての水の確保を通して砂漠を緑化する難事業を思い立った彼の動機は、既に彼自身の著作や事業の進捗の広報によって広く正確に知られている。

内村鑑三の「後世への最大遺物、デンマーク国の話」を嘗て読んだ私には、かのダルガス父子が敗戦で荒涼としたユトランド半島にあちこちから樅木を移植して実験を重ね、漸く成功した結果、樅樹林の下層に豊かな牧草地造成ができ、その結果、今日の豊かな酪農国家が成立しているのだという忘れがたい講演を即思い出す。

彼は、これをあくまでアフガン住民の為にこれを実践したのだ。

よきサマリア人を実践したのである。